

田
地
文
子
全
集

第
一
卷

新 潮 社

円地文子全集 第一巻

定価三三〇〇円

昭和五十三年 四月十五日 印刷
昭和五十三年 四月二十日 発行

著者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一

編集部 東京(〇三)二六六一五四一一
振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替えいたします。

円地文子全集 第一卷 目次

〔戯曲〕

ふるさと

姉

すぎありき

晩春騒夜

清少納言と大進生昌

三角謎

菩薩来迎

107 91 65 49 37 21 11

霖 遁 あ 白 春 彼 母 火
 昼 は 女
 ら の の 地
 良 昔 の 獄
雨 走 し 人 に 獄

226 211 193 177 160 151 137 120

〈短篇小説〉

女 の 冬	煉 獄 の 霊	原 罪	風 の 如 き 言 葉	散 文 恋 愛	寒 流	社 会 記 事
-------------	------------------	--------	----------------------------	------------------	--------	------------------

377 361 331 310 276 258 243

昨日の顔

電

女
三
題

〈隨筆〉

『女坂』より

『南枝の春』より

解題

561

502 441

428 418 399

円地文子全集 第一卷

戲
曲

ふるさと

時 文化七年 五月

処 信濃 柏原

人 小林一茶（弥太郎）

仙六 一茶の異母弟

おたつ 仙六の母

おとら 仙六の妻

舞台正面にかなり大きな百姓屋の母屋がある。広い土間。頑丈な柱のある座敷。奥の障子はあけ放されて背戸口が半ば見える。

家の下手に大きな柿の木が一本。井戸。

背後には青田のひろがり。

遠くは街道の並木も見え、高い山々の四時絶えせぬ雪も見える。

真夏の太陽がふと雲にかくれたむし暑い午後。

下手から一茶（四十二、三歳）が単純な旅装い、笠をもち登場する。

彼はいつになくのんびりしている。

一茶（滴る汗をふきふき）やれやれ、やっと家迄来たわい。ほう、背戸の柿が大分なったな。（彼は柿に近よってその青い実に触れる）ははは。おれの頭のように硬いわ。古い木だがよくいつまでも枯れずに活々しているなあ。（彼

は柿の枝に手をかける。と一匹の**かなぶん**が葉の間から飛び出して彼の顔にぶつかる。ほい(驚いて手にとり)おお、**かなぶん**か。御主とも古い馴染じやなあ。(そつと虫を柿の葉にのせてやる。周囲をみまわす)ああ、ああ、やつぱりたまたま帰れば故郷もなつかしいわい。故郷や故郷や——。ああ一句浮びそうじやな。(にこにこ笑う)どれうちへ入るとしようか。(彼の顔が急に暗くなる)仙六奴。内にいおるかしらん。(ぬすむように家へ寄る)はておふくろも留守かな。(背戸に廻ろうとする)

声 (奥からきびしい声で) 誰じや。他人の内をのぞきくさるのは、空家じやないぞ。

一茶はおかしい程ふるえ上る。

仙六の嫁おとら (二十三、四歳の丸顔の小ぶとりにふとった人のよさそうな女房。浣团扇を手に汗を拭いつつ出て来る)用があったら案内したらよいわ。気をつけんかえ。

一茶 (女の顔をみてようやく落ちつく思入れ。ずつと内に入り)やれやれ。お前は見た事のない人じやが、さては仙六の嫁御かえ。

おとら (悸つとして) あれこの人は。一体お前は誰じやえ。見たところ坊様でもないようなが。

一茶 わしは仙六の兄の弥太郎じや。(むつつり言って顔を見る)

おとら (驚き) お、まあ、ではお前が、旦那殿の。知りませなんだ。さっきからの不調法はまっぴら御免なされませや。さあさあ上らっしゃりませ。いま洗足をくんで来ましようぞ。(あたふた井戸へゆく)

一茶 (喜ばしげに) ええ、そんな事はしてもらわんでもわしがする。お前さんも忙しかろう。かまうな、かまうな。おとら (水をもつて来る) さあ、足を出しなされ。洗って上げよう。

一茶 何のそれに及ぶものか。それよりも何やら焦げる匂いがするような。台所は大事ないのか。

おとら おおほんに、煮物が御座ったわい。では自分で洗って下されや。わしはちょっと勝手へ行きますぞ。(起つてゆく)

一茶 (快く足を洗いつつ) のう、嫁御。仙六は野らかえ。

おとら 河原田の水を見まわりに朝から出て行きましたわ。今この勝手をすましたらすぐ呼んで来ましようわい。

一茶 (避けるように) ああいやいや。それには及ばぬ。仙六も忙しかろう。(探るように) 母御は、見えぬようじやな。

おとら おふくろさんか。これも河原田へゆかれたが、もう八つ時じや。おふくろさんは帰られましようぞ。

一茶 (悸つとする思入れ) おふくろ殿は達者かな。

おとら おおたっしゃとも。朝夕の御膳は五郎八茶碗に四、

五杯をかかされぬわ。ほほほほ。 (出て来る) 兄御さんはおふくろさんとえろう気が合わぬそうじゃな。(無邪気に) おふくろさんがお前の子供の時分大そういじめなされたのじゃとのう。わしはこの間、御本陣の御上さまにお前の事をいろいろききましたぞや。だが、あのおふくろさんが何故そんなひどい事をされたかなあ。わしにはどうも解らぬ。

一茶 (話を外して) お前さんはいつこへ来たのじゃ。わしには話がない故少しも知らんであった。何処のお人じゃ。

おとら つい隣村のものじゃがな。去年の春来ましたのじや。

一茶 道理こそ。私は一昨年秋にちょっと戻ったばかりじゃからのう。(にこにこして) 仙六はお前さんにやさしゆうするかえ。

おとら (笑い崩れる)

一茶 (苦笑して) 仲がよいと見えるな。それで母御は小言もいわれぬかえ。

おとら 時々は怒りなさる事もあがるがな。その位の事苦にはならん。

一茶 (ひきこまれて、ふと、まためいりこむ)

おとら (暢気に) そうそう兄御さん。会い早々じゃがな、わし御前に頼みがあるが聞いてくれなさるか。

一茶 わしにか。頼まれる風でもないが、一体何の頼みじゃ。

おとら 何時でもいいでな。わしに一つあの俳諧とやらいうものを書いて下さらぬか。

一茶 俳句を。(笑う) お前さんも見かけによらぬ風流人じゃな。

おとら 御本陣の御上さまに聞いたのじゃ。お前は偉い俳諧が上手じゃげな。

一茶 お前そんなものを貰ってどうする気だ。

おとら わしは何にも持っていないでな。御宝物にしてしまつて置くのじゃ。よう、何時でもいい故、書いてくろっしゃれよ。お前どうせゆっくりしてゆくので御座ろう。

一茶 ああいいとも、いいとも。書いてやる。書いてやる。おとら たのみましたぞや。おおほんとに、御茶も上げなんだ。お前、御膳は未だで御座ろう。

一茶 いやもう前の立場たてばたですまして来た。

おとら 何故そんな事をしなさる。うちへ来て食べればいい事を。むだなお人じゃ。

おとら、茶を入れに台所に入る。夕立雲が空に現われてみる間に暗くなる。

一茶 おお、恐ろしく暗くなったな。むし暑いと思つたら

一雨来るかな。おれの嫌いな雷様だけは鳴らねばいいが。桑原。桑原。どれ仏様に御挨拶するのでしょうか。(彼は仏壇を開く。驚き)おや。何じゃ。ここは押入に変わっているわ。嫁御、この家の父さまの御位牌はどうしたのじゃ。

おとらの声 御位牌か。おお、その仏壇の仏様は家におくと何のかの設置がめんどろじゃと言うて去年おふくろさんがお寺さんへもってゆかっしやれたぞえ。

一茶 何じゃと。おふくろが寺へもって行った。

烈しく雨が降り出す。

一茶 (怒って)人非人ども奴。後家の身で主の位牌を寺に遣るものが何処の国にあるぞ。仙六奴も仙六奴。(手をついて)父様おゆるし下さい。弥太郎が国を出ております間にかような無礼をして、さぞさぞ口惜しゅう思召しましよう。(涙をふき)ええあの鬼母奴。おとし戻った折流石は年に連れて、氣も折れた様子と、心から嬉しゅう思ったに、ええ、ええ、未だ性根が直らぬそうな。(突然はっと立ち上る)ああもうおれは帰ろう。この様子ではこのようなところにいたらどのような事になるかもしれぬ。恐ろしい。(彼は土間へ降りようとす)

突然すさまじい雷が鳴る。

殆ど同時に。

声 おとら、おとら。

おとら (台所で)あれ、おふくろさんが戻られた。

家の裏手より一茶の継母、おたつ、裾をからげ、手拭を頭にかぶってかけ込んで来る。

おとら (飛んで出て)まあまあ、どうなされた。ぬれましてたかえ。

おたつ (声あらく)ぬれた段か。おぬしはうちにいて何していたのじゃ。この夕立雲に傘一つ持って来くさらぬとは、何という鈍な奴じゃ。さあさあ、うっかりしていと早く洗足を取ってくれよ。

おとら 御免なされませ。今あの兄様がどこやらから戻られたでな。つい、話をして暇をつぶしていましたのじゃ。

言い棄てて井戸へゆく。

おたつ (悴として)なに兄様じゃ。(ふと見返ると暗い屋内の隅にうすくまっている一茶とぼったり視線が合う)

これより先一茶は雷鳴のひびきをきくと等しく座敷の隅までかけ込んで、耳をおさえてうつ伏してしまふ。継母の尖声の聞え始めた頃、心心地がついて顔をあげ、母親を見たが、